

瓔珞模様火入を置かれたるなど、故人の茶趣味も思はれて誠に有り難く思はれぬ、斯くて薄茶一巡するや、漸庵より老樹の間を縫ひて、大蛇のノタクリたるが如き磴道を下り行けば、崖下に廣き平地ありて、其片隅に待合あり、茶事の際は母屋の横手を廻りて此待合に寄付き、夫れより漸庵に繰込む趣向にして、崖上を見上ぐれば、數株の老松枝を交して晝猶ほ暗く、幽邃閑寂の趣、城市中とも思はれず、余が故人の生前に此茶室の客と爲る事能はざりしは誠に遺憾の至りなれども、今日名器探究の爲め測らずも當家を訪問して、此茶趣を掬する事を得たるは、豈に故人の茶魂の冥導する所あるに非ずや、是より再び元の客間に立歸りて、未亡人と故人の上に就き、暫時雑談を試みしが、當家の伊賀躰躰花入は、故人が最愛の品なれば、其追善茶會の際樂焼にて之を寫し、知人に分贈したる由にて、今日の記念として余にも一個與へられければ、何から何まで残る所なき好意を謝しつゝ、夕刻暇乞ひして此思ひ出多き碧壺をぞ立去りける。

五

余は今度大正名器鑑編纂の爲め、尾州徳川家御所藏茶入茶碗拜見の許可を得て、名古屋

屋表に出張の序を以て、同地諸名家秘藏の名器をも拜見し、又随つて撮影せんと思ひ立ちしに、就き其斡旋方一切を富田重助、關戸守彦兩君に依頼せしに、兩君も快く承諾して、夫れ々々藏器家に交渉し、便宜關戸、富田兩家に其所藏品を持寄りて、六月七日午前は關戸家、午後は富田家に於て、最短時間に名古屋市中諸名家の秘藏を悉皆拜見し、盡す事を得るに至りたるは、偏に二君の盡力と余の企畫を贊襄して、斯る雅量を示されたる諸名家の好意に因らずんば、斯くて七日午前九時頃堀詰町なる關戸家に推參せしに、客間の床には豊彦筆墨竹二幅對を掛けて、清風迎客の茶趣を示し、名器觀覽には光線の明るきが宜からんとて、奥の間の障子を明け放ちて、席上に毛氈を敷き、同家のと諸家より持參のものを其上に展陳し、順次拜見せし、其品目は左の如し。

關戸守彦氏所持

- 一 中興名物廣澤手銘松陰茶入
- 一 久田宗全手捏茶碗銘鬼薊
- 一 染附辻堂香合
- 一 青磁桃香合
- 一 青磁莊子香合

伊藤吉六氏所持

一 利休所持長次郎赤樂茶碗銘ヌレガラス
一 斗々屋茶碗銘葉鶏頭

中村太郎吉氏所持

一 長次郎黒樂茶碗貧僧一名朝鶉

岡谷惣助氏所持

一 古瀬戸肩衝茶入銘奈良屋

一 伯庵茶碗銘花山

一 斗々屋茶碗銘螢

吹原九郎三郎氏所持

一 小服刷毛目茶碗銘白浪

一 萩焼茶碗

一 粉引徳利

如上器物中には茶入茶碗以外の出品もありたれども是れは當方より此機会を以て撮影の許可を乞ひたる者あり又先方より余の鑑定を乞はんとて態々持参したる者

ありて後日の参考の爲め何れも之を撮影したるに依り全く拜見を終りたるは正午を過ぐる三十分頃にてありき。

六

關戸家及び同家に持寄りたる諸家の名器を拜見し終り別室にて午餐の饗應に預かりたる後余等一行は午後一時半葵町なる富田重助氏邸に赴きたるに新邸大廣間の床には遠州藏帳探幽筆親子獅子三幅對の中幅を掛け諸家より持寄りたる名器を床の間に陳列し置かれしかば入側近くに毛氈を敷き順次持出で、拜觀せしが其品目は左の如し。

富田重助氏所持

一 刷毛目小服茶碗銘合甫

一 錐吳器茶碗

小出庄兵衛氏所持

一 人形手茶碗

八木平兵衛氏所持

一 久田宗全手捏茶碗銘初櫻

一 青井戸茶碗銘久田

佐野治朗氏所持

一 空中手捏茶碗銘寒月

一 柿の蒔茶碗銘京極

一 甫十瓢筆不味公銘夕顔

一 砂張三象花入

一 瀧川家傳來古銅象耳花入

織田徳兵衛氏所持

一 鬼熊川茶碗

余は今日關戸家及び富田家に於て前記の如き多數の名器を拜見して、一々實見記を
作成したれども、之を當欄に記載するは餘りに煩雜なるが故に、其中數點に就き略評
せんに、宗全手捏中には鬼薊の骨柄其名の如く群を抜きて優れたるを見る、刷毛目
茶碗は合甫白波夫れ、其特長ありて容姿佳き姉妹の如く、是れぞ當地に於ける此
種の茶碗の双絶なるべし、人形手に至りては天下第一の稱空しからず、内面人形と人
形、唐花と唐花と相對して其紋様に自ら變化あり、外部高臺廻りより胴にかけての

轆轤日本來茶味に乏しき、此種の茶碗に言ふ可からざる柔かき風趣を添へたるは誠
に感服の外なきなり、長次郎作貧僧一名朝鴉茶碗は大寂にして、同人作なる彼の風折
と異曲同工と云ふべく、空中寒月茶碗は黒筒茶碗の内外に跨りて、黃釉の三ヶ月を現
はしたるが此名を得たる所以ならん、名ある器物には必ず其名に負ひたる趣味あり
て、一々説明すれば際限なきが故に、此等細評は總て名器鑑の方に譲りて今又細敘せ
ざるべしと雖も、余は當市諸名家が態々名器を指定の場所に持寄りて、觀覽並に撮影
の便宜を與へられたる其好意に對して、滿腔の感謝を表せざるを得ざるなり。

七

富田重助氏の新邸は葵町に在り、此處は舊藩時代徳川侯家の別邸なりし由にて、邸内
に老樹鬱蒼たる小丘あり、丘下に清水の湧き出づるを利用して大池を作り、其池に臨
みたる廣間十五疊、次の間十二疊半、三の間十五疊三間續の大廣間を當日名器の陳列
場に供せられしが、片隅に探幽筆、人物屋臺金屏風を立て、鎌倉建長寺傳來大銅鑪を鎌
倉彫銅鑪掛に掛けたるのみ、他に何等の裝飾を施さざりしは、陳列の名器と差合ふを

避けたる者なるべし、左れば名器一覽終るや、此大書院と遙に掛離れたる慶雲亭と云ふ、新席廣間に於て薄茶を供すべしとて、當日名器持參の諸名家を始め、余等一行をも同亭に案内せられしが、入口に掲げたる木額に慶雲亭の三字あるは、益田鈍翁筆にて大に大師様を發揮したるが面白く、亭は上段四疊半に一間四方床、次は十疊、其次は六疊の三間續きなるが、上段の床には松花堂筆宗祇法師の像を掛け、其前に青磁鳳凰耳の花生を置きて、實附臘梅及びニンドウと云へる草花を挿みたる美事さ言ふばかりなく、床脇琵琶棚には上に寶鐸を吊り、下に短冊帖を置き、之に接續して桑木地學の棚と云へる釣棚を取附けたるは、其棚の戸張附に遠州筆にて學の一大字あり、其傍に勿謂不學、今日而有來日の文句あるに因り、主人の好事にて斯く命名せしなりとぞ。此棚には唐物荷葉盆に金紫銅香爐を飾り、又之れと並びて前に火竈口を控へたる書院には青磁硯屏、同墨臺、松聲硯、堆朱筆等の文房飾を爲し、唐物屈輪盆に家隆卿筆和歌會作法下巻を載せたる飾附、何れも名品揃ひにして、一々其品質を説明せんとすれば、殆ど際限なきが故に、今又縷述せざるべし、扱此上段に接する十疊の間の一隅には、桐

木地長板の上に奈良風爐を置きて、辻井播磨作八景釜を掛け、炭手前器具は左の如し。

- 炭斗 烏府
- 香合 堆黑地紅王子 喬騎鶴吹笙圖
- 炭箸 金馬柄
- 羽箒 青鸞
- 環 埋忠作

又三の間は天井裏を見せ、佗作りにて何人の筆にや得月と云へる古作の木額を掲げたるに因り、之を得月の間と稱すとかや、而して其壁床に掛けたる松花堂の歌は、知るを知る人こそ知らぬ知る人を

知るてふ知るに知らせずはなに

以上三間は亭主の意匠にて上段を眞次の間を行、三の間を草に構造したる由にて、其飾附さへ猶三様に變化し居るは、數年間に互る經營に於て、亭主が慘澹たる意匠を費したる痕跡歴々として觀るべきなり。

八

富田邸内慶雲亭より露地を隔て、數十歩外に紅葉茶屋と云へる大腰掛待合あり、此腰掛は同時に十餘人を休息せしむべく、左側に茶汲場、右側に袴着け席ありて、大客の

場合など最も風情ある小憩茶屋と爲るべき者なるが、先般當亭主は名古屋城門の古
 材に彫刻せんとて余に紅葉茶屋と揮毫すべく嚴命せられしに依り、已むを得ず認め
 て回送し置きしに、今や拙筆の額面が腰掛の正面に掲げられ、彫刻の際幾分美化され
 たるは誠に有難き仕合せなれども、是れには只管恐縮の外なく、茶屋の名の紅葉を我
 顔に散らして、殆んど仰ぎ見る可からざる苦しさ、今度に懲て今後額面の執筆は斷然
 拒絶すべく決心せり、扱て當日名器持寄りの諸名家は、慶雲亭にて薄茶一服後、點燈前
 に、悉く辭し去りければ、亭主は先月來新築開きとして連日祝宴を催したる其趣向
 を以て、當夜當亭に於て余及び織田徳兵衛氏等に鄭重なる懷石を出だされ、其後愛婿
 孝造氏の手前にて薄茶を饗應せられしが、其器物は左の如し。

茶碗

青井月、小堀大膳箱書
銘男山

茶入

五郎棗

茶杓

江岑作銘羽衣

水指

阿蘭陀煙草の葉

建水

木地曲

蓋置

象牙製竹の節

干菓子

堆朱盆、紅白慶の宇打
出有平紅葉の花

生菓子

仁清作菊透し鉢
肉桂入柏餅

薄茶一巡後は、令夫人も出座あり、亭の名に負ふ慶雲驪驤たる新築座敷に於て、家運長

久を祝する松の緑の長唄など數々の餘興ありしかば、深更亭主の歡待を謝して退邸
 せしが、余は今茲に當家新築輪奐の結構乃至泉石の布置等を細敘して、名古屋遠州の
 稱ある當亭主の多趣多様なる意匠を世間好事家に紹介するの暇なれば、亭主が目
 下構造中にて來春頃開席すべしと云ふ猿庵と稱する茶室の出來上りたる時、重ねて
 委細記述する事と爲し、今又饒說せざるべし。
 扱て八日朝は六七兩日に拜見洩れの名器を、旅宿丸文方にて一覽後直に撮影に着手
 せしが、其品々左の如し。

一斗々屋茶碗銘龍田

八木平兵衛氏所持

一釘彫伊羅保茶碗銘秋の山

田中久彌氏所持

一光悦作銘時雨茶碗

森川勘一郎氏所持

一同作銘乙御前茶碗

一唐津茶碗銘菖蒲刀

斯くて豫て翹望し居りたる名古屋地方の名器探究が、近々五日間に十二分に其目的を達する事を得たるは、徳川家其他諸名家の深厚なる同情の賜にして、誠に欣幸の至りに堪へず、小詩あり掲げて以て喜びを表す。

遍看玉腕與瑤壺

眼福如予天下無

好古風流強我意

飽探龍窟獲驪珠

今枝ノンカウ

(大正八年六月五日)

五月初旬余が加州金澤山川庄太郎氏宅に於て一覽したる、同地今村次七氏所藏今枝ノンカウ茶碗は、漆にて大疵を繕ひあるにぞ、如何にして斯く破損せしやと不審せしに、侍座の一人、是は當地の表千家宗匠吉倉惣左が世に時めきし頃、此茶碗と青山ノンカウと二個を併有せしが、或る時茶事中水屋にて破損しければ、直に青山を代用して事なく當日の茶會を終りたる由聞き及べりと物語らるゝまに、茶會記中に記し

置きしに、此程吉倉宗匠よりの傳言に、今枝茶碗破損の事實は左に非ず、明治十一年十一月より十二月にかけて、父惣左衛門玉精が連日正午茶會を催しける時、自分は水屋を掌り、一日今枝茶碗を布巾にて拭ひたるに、自然と三つに破損せしかば、能く之を檢分せしに、元來大疵を繼ぎ合せたる其割目が取離れたるにて、遽に繕ふべきにも非ざれば、已むを得ず、青山ノンカウを以て之に替へたる次第にて、自ら取落して破損せしに非ずと言へり、如何様是れは爾かあるべき事にして、宗匠が名物茶碗を取落とすと云ふ事、實際有り得べき事ならねば、余は宗匠の説に依りて其誤傳を取消すべし、左れど余は事の序に聊か識者の教へを乞はんと欲する者あり、今度金澤に於てノンカウ七種茶碗を悉皆檢覽せしに、今枝の如き大破損は格別とするも、大抵無疵なる者なきは何故なるや、唐物若くは瀬戸茶入の如き時代古き者は、茶事の未だ流行せざるに當つて粗末なる取扱を受けたる場合もあるべければ、長年月間に自然疵所を生じたるならんと雖も、ノンカウ時代に至りては、茶事隆盛の極點に達し、其作品の如き最も時人に珍重せられたる者なれば、取扱の龜相に依りて破損する場合極めて稀

なりしならんに然も無疵なる者甚だ少きは如何なる理由なるや、古宗匠中には茶碗に寂味を附くるが爲め故意に之を破毀せし者ありとの事なれども、是れは稀有の場合にして、數々の名器が比較的十分に破損し居る主なる原因とは見る可からず、或は往時交通不便の際、遠路運送中荷造の不完全若くは其他の事情に依りて破壊せし者もありつらんが是れとても常に然りと云ふ可らず、兎に角加賀ノンカウ七種が其一例を示せし如く、天下の名物茶入茶碗中に破損品の割合に多分なるは、何か隠れたる或る原因あるに非ずやと思はるゝにつけ、今枝ノンカウ破損に關する記事の序を以て、敢て識者の高教を乞はんと欲するなり。

嵯峨の靜庵

上

(大正八年六月十日)

關西道具商の巨擘京都の林新助氏は從來書畫骨董専門にて茶器を取扱はず、所謂中道具屋の部類に屬せしが、數年來道具社會は茶器を以て主要品と爲すの形勢を生じ

たるに因り、機敏なる氏は早くも其方針を轉じて所謂寂物商賣を我が領分に引き入るゝに就ては、身躬から茶事を興行して其中の甘酸を味はざる可からずと思ひけん、近時東西入札市場に現はれたる名品中、他日自家の使用に充てんとする者を買取り、悉く之を非賣品として深く庫中に秘藏したる其品々は、積り積りて今や優に一回の茶事を催すに足るべき程度に達したれば、小倉山麓嵯峨野茶寮中の靜庵に於て五月下旬より初陣茶會を催し、余等をも逸早く案内せられけるが、雅俗用務に取紛れ、て當時參席の機會を得ざりしに、六月初旬余が名古屋行の序を以て、是非とも入浴せよと申來りたるに依り、東都より梅澤鶴叟、尾州より森川如春を誘ひ出し、六月十日正午三人打連れて嵯峨野の茶寮に赴きしに、嵐山の四五町手前より新緑滴らんばかりなる竹林を穿ちて、小倉山間近に達しける頃、畑中に瀟洒たる一構の別莊あるは即ち林氏の靜庵なり、茅葺屋根に苔蒸したる門を入れば、篋の音は幽に聞えて、浮世離れし嵯峨野の氣分の身に沁むやうなるも、嬉しく頓て三疊寄附に打通れば、當日の末客を承りたる大阪の山中吉郎兵衛氏は、先着を以て余等の着到を待受け居られしにぞ

寒暖の挨拶終るや先づ席上を見廻せば、壁床には吳春筆雨中漁舟圖を掛け、綾手毛氈の上には雲鶴筒火入一閑張手附煙草盆を置き、美事なる赤繪茶碗にて白湯を運び出されたる初風爐の寄附如何にも淡泊として氣が利きたり、程なく庵主出迎はれければ、一同庭前に立出でしに、左に近く嵐山を控へ、正面は直に小倉山に對して、四圍の新緑は皆集まりて、此庭前の物と爲り、歴史の鳴り物入りにて眼前に展開したる初夏の風景得も言はれず、庭の片隅なる木立の間を辿りて梅見門を潜れば、庵室の破風に石川丈山筆らしき静の一大字匾額懸り、苔蒸したる石燈籠の前なる蹲踞石には、笈を傳ふ山水のトク〜と流れ落るあり、扱入席して其床を見れば、寛永五歲抄夏日澤庵野老書之の長落款ある、緑水青山四大字の堅幅を掛け、二疊臺目中板席に與九郎作奈良風爐を置きて、寒雉六角口螺貝銀附釜を掛け、主人立出で、慇懃に余等が遠來の勞を謝したる後、直に懷石を出されしが、其獻立は左の如し。

- 汁 三州味噌、冬瓜、蓴菜 向附 樂長入寫、黃瀬戸、鱒、水前寺海苔、山葵、甘酢、椀 鱧、岩茸、隱元、柚花
- 燒物 乾山、藤手、附鉢 吸物 すつぽん、針生薑 八寸 海老、青唐辛子

- 強肴 青磁、双鱼鉢、天貳羅、摺大根 浸物 赤繪金襴手、見込、兎模、小鉢、嫁菜
- 酒器 染附蓋鐵鉢子、祥瑞瓢形、德利 菓子 小倉山

中

前記靜庵の潤澤なる懷石料理を盛たる其器物の珍奇美麗なるは、名を聞いて直に其物を想像し得らるゝ事ならんが、猶ほ此外にも、蓼酢を入れたる仁清小汁、次鹽辛を盛たる志野グイ、呑み角形大盃の如き、何れも極上無瑕絶品と云ひ置かば、庵主が數々の入札場より多年精選したる、其苦心を推察するに難からざるべし、斯くて懷石終るや、庵主の炭手前あり、其器物は、

- 炭斗 編竹、胴紙、捻足 香合 鎌倉彫義經 羽箒 白鶴
- 灰器 旦入作赤樂 火箸 鐵張拔

香合鎌倉彫義經は、小形にして甲に松下人物の模様あり、抑も鎌倉彫に大小二個の名物香合あり、之を頼朝義經と云ふ、頼朝は今其所在を審にせざれども、義經は即ち此香合にして、赤星家第一回入札會に出でたるを、庵主自ら買取りて、今日まで保藏した

る者と知られたり、頼朝はイザ知らず、鎌倉彫にて氣の利きたる此義經の如き他に其比類あるべしとも思はれず、梅澤鶴叟など當時競争者の一人なれば、今日之を見らるに付け、何故猶は一層奮發せざりしかと今更後悔の體なりき、扱て中立は茶席と梅見門の間に在る腰掛にて、合圖を用ひず、庵主自ら出迎はれければ、再び入席して其床を見るに、石州作輪なし二重切竹花入に、杪權及びガクの二種を挿まれしが、花入は石州作にして寂竹の選擇面白く、或は夫れかと發言したる者なきに非ざれども、先づは宗和か遠州かと鑑定に苦しみたるも無理ならず、風爐の邊には火變り面白き備前種壺水指を置き、白極緞子の袋掛りたる茶入を飾りて、庵主の濃茶手前ありしが、其器物は、

茶入 松花堂所持
茶杓 金森宗和作
茶碗 吳洲山水模様

建水 木地曲
蓋置 青竹引切
茶 松の光

庵主は年配四十恰好、白哲豐頰、大家主人の風采立派なれば、紋服の上に十徳を着けたる姿の好く似合ひて、一流の宗匠かと思ひ紛ふばかりなる其上に、平常亭主振の如才なきは人の能く知る如くなれば、何人に鑑定させても是れが初陣茶會の主人公と見て

取る者なかるべし、扱て吳洲茶碗は、昨冬加州石黒傳六氏の藏器入札會に於て獲られたる者にて珍らしくも、其作行に茶味あるのみならず、其藍繪山水模様が雪舟の下繪かと思はるゝ程なるは、誠に稀有の名品にして、名のみを聞きては小間用に如何あらんかと思はるれども、左に非ず、左れど庵主も左る者なれば、之に陶器茶入を取合はせず、松花堂好み鐵刀木蓋、籐組瓢茶入を用ひたるに依り、變物同志好く取合ひて面白く、其配合の妙なりしは、誠に感々服々なりき。

下

靜庵の濃茶一巡終るや、薄茶は廣間にて差出すべしと云ふにぞ、梅見門を出て、表廣間に打通れば、十二疊半、一間四方床に平瀬家傳來雪村筆波に、鷺の横物を掛け、唐物木耳花入に百合野菊野薔薇を挿みたる風情甚だ佳し、書院には唐招提寺瓦硯、青磁獅子筆架、染附墨臺、堆朱筆等の文人飾を爲し、其上に半井家より傳はりたりと云ふ利休が政所に奉りたる撞木と喚鐘を掛け、唐物屈輪軸盆に隆達節卷物一卷を載せて、薄茶手前に取掛られしが、其器物は左の如し。

釜

奈良風爐
道也作あられ

水指

長板に
仁清作貝耳

蓋置

空中作

茶入

遠州藏帳
六角青貝頭切

茶碗

青井戸小服

替

九谷燒
扇模様

香合

堆黒地紅寶珠
四君子圖

菓子

獨樂盆
長生殿紅白

如上盡善盡美の廣間飾附の外に、雜器に於ては、合利煙草盆に青磁しのぎ一對の火入を置きたるなど、小間廣間に如何に主人が此茶事に精神を籠めたるやを推測するに難からず、猶ほ主人は當日薄茶一巡後、遠方來訪の余等を慰めんとて、餘興として先代愛藏の仁清作雌雄大香爐を示されしが、肉冠を紅にし口嘴を黄にしたる外羽翼總體銀粉を以て描き、別に他の彩色を施さるが却つて高尚なる氣品を現はし、これに對して神々しき感覺を生ずるは、流石に仁清の仁清たる所以ならん、此雌雄は先般加州にて一覽したる、山川庄太郎氏の雄雉と本來一對なりしなるべく、仁清香爐として天下第一品と稱せらるゝ彼の雄雉に配すべき此雌雉を、先代以來非賣品として保藏し居る林家主人の意氣は、世間普通の道具商と固より同日の論に非ざるなり、扱茶人眼を以て今回靜庵の茶事を見れば、一より十まで盡善盡美にして、結構は在り、茶趣は

未だしと評する者もあらんかなれども、茶事は須からく其主人の茶事たらざる可からず、若し當庵主の茶會に、某々宗匠の如き疵物若くはしみたれたる器物を並べて、東西の華客を招きたらんには、只一會にて懲々し、再び其招ぎに應ずる者なきに至らん、即ち今回の茶事は、靜庵主人の性格と業體とを器具趣向の上、に現はしたる者にして、此人にして此茶ありと言ふが適當ならん、勿論細かに批評すれば、缺陷の指摘すべきものなきにあらざれども、初陣茶會としては、陣容の堂々たる今日日本國中如何なる紳士の茶會と雖も、此右に出づべき者ありとも覺えず、余は乃ち遠路參會の徒勞ならざりしを感じて、厚く主人の好意を謝すると同時に、双手を舉げて、其初陣の成巧を祝する者なり。

葉雨庵開席

(大正八年六月十一日)

操觚者にして後實業家と爲りたる者は、世間其人に乏しからざれども、實業家にして

後更に茶評家と爲りたる者は、東都に於て唯余と野崎幻庵あるのみ、而して余が一足先に實業界を失敬して風雅でもなく洒落でもなき、暢氣俱樂部に仲間入りせしを見るや、幻庵頻りに之を羨み、少しも早く二一天作の、木を脱せんと心掛けたる其甲斐ありて、近來足底の飯粒が幾分粘着力を緩めたる者の如く、今度こそはドシ〜自ら茶會を催し、又ドシ〜茶評を試むべしとて、先づ其手始めに試みたるは、澁谷羽根澤自邸内に、數年前より構造せし葉雨庵の開席茶會、即ち是なり、左れば此茶會は、幻庵が風雅生活の劈頭に於ける一種のデモンストレーションにして、寄附も露地も小間も廣間も、懷石も道具組みも、總て自營獨造にして、新席の下に他人の鼾睡を容れざれば、何處からでも批評を試みよと言はんばかりの氣息甚だ荒きに背かず、未來は知らず、幻庵としては實に空前の大出來茶なりとの評判、早く已に同人間に傳はりければ、余は六月十日正午嵯峨の靜庵茶事に臨み、翌十一日歸京、勿々其正午茶會の案内に應じて、羽根澤なる野崎邸に馳參ぜしに、玄關手前に新に設けられたる小門あり、其門内の一構へは、即ち葉雨庵の寄附にして、三疊敷に隅板あり、天井裏を見せたる一室の壁床

に掛けたる横物は、小堀權十郎蓬雪筆素瀧の圖にして、讚は俊成卿の歌、
いかなれば雲間も見えぬ五月雨に

さらしそむらん布引の瀧

を書附けるが、時節向きと云ひ、幅柄も此床に打つて附けにして、寄附より早や、庵主の力瘤が如何に隆々たるやをトするに足る、隅板の上には古銅瓶掛に銀瓶を掛け、茶盆には緋襷香煎入に染附蘭繪茶碗を取合せ、紫檀木地に葵唐草櫻紅葉を蒔繪したる煙草盆は、不味公好みの由にて、抽斗に煙管及び煙草あり、又掛硯を附屬して、大名の駕籠内用に供せし者とも見受けらる、猶席隅には時代錫縁菊折枝蒔繪亂れ箱を置かれたるが、此等飾附の中にて、緋襷香煎入は殊に人氣役者と爲り、一座感服の中心と爲りしは、蓋し庵主の豫期せし所ならん、相客は原三溪、益田多喜、山澄、力太郎にて、余を併せて四客なりしが、頓て腰掛までとの案内に接して、此寄附を立出づれば、露地は箱根の坂路の如く、大小組石延段にて、塀際を傳ひ、母屋の前を通り抜けて、十數歩下り行きたる右側に腰掛あり、此處にて一同休息し、徐に庵主の出迎へをぞ待ちたりける。

二

葉雨庵露地の腰掛に待つ間程なく庵主は咳一咳して崖下庵室の方より登り來り、丁寧黙禮して引下りしにぞ、原三溪を先達に推し、一同更に此磴道長露地を下り行けば、梅見門の内に一構への庵室あり、門は茶室と相對して約十歩に過ぎざる其中程の右手に蹲踞石、石燈籠、型の如く打並びたるが、其蹲踞石の自然に鐵鉢狀を成し、時代古く苔蒸したるを、三溪が殊の外感心して、如何にも光悦などの好きさうなる名石なりと評せしは、其謂れなきに非ず、崖上は松翠楓綠、天を蔽ひて溪間に入りたる心地せらるゝに、青竹筧を傳ふる水のトク〜と此蹲踞石に流れ落つる風情得も言はれず仰ぎて庵室の破風を見れば、大徳寺天祐和尚の筆にて中央に葉雨の二大字あり、其傍に

古語云、聽雨寒更盡、開門落葉多、

夢伴子書

と書かれたる匾額あり、扱は此庵室を葉雨庵と稱するならんと今更ながら其好庵名

を得たるに感服せしが、頓て入席して其床を見れば、足利時代大徳寺の長老として其名を知られたる、宗顯禪師の黒蹟横物をぞ掛けられける、而して其文句は左の如し。

清風掃明月、明月掃清風、掃々底邊、明月自明月、清風自清風、齋中移茶鼎、一啜供主翁

天文龍集癸丑孟夏日

江隱宗顯書

席は三疊臺、目中板にて原叟型に庵主の新機軸を加へたる者とかや、道具疊には了全作少庵、好み風爐に、透木を以て同人好み、初代道也作霰巴平釜を掛け、庵主挨拶の後直に懷石を出されしが、其獻立は左の如し。

- | | | | | | |
|----|----------|----|---------------------|----|------------|
| 汁 | 三州味噌 | 向附 | 赤繪皿、山葵 | 椀物 | 冬瓜 |
| 燒物 | 饒州鉢、鮎鹽、燒 | 吸物 | 山椒の實 | 八寸 | 海老百合、青唐からし |
| 香物 | 斑唐津小鉢、胡瓜 | 酒器 | 鈍阿燒、德利鐵銚子、青磁及染附網の手盃 | 菓子 | 水羊羹 |

初風爐の懷石は用ふべき鳥に乏しきが爲め、紋切型の鱸や鮎を主材とするの外なく、何事にも獨創多き當庵主と雖も、猶ほ此月並的料理の範圍を脱する能はざるは同情に堪へざる事ながら、器具と共に獻立も亦甚だ無事なるを、寧ろ無事として褒め置く

べきのみ斯くて懐石終るや炭手前あり器物は、

炭斗 唐物八角
透し箔繪

香合 時代錫綠菊蒔繪

羽箒 鶴

灰器 南蠻内漚

火箸 鐵張拔竹節

以上器具は何れも結構に拜見せしが、中にも蒔繪香合は片桐石州所持の由にて、一見東山時代と首肯かれ、庵主が多年嗜みの程も想ひ遣られて嬉しかりき。

三

葉雨庵中立の腰掛は、庵前の梅見門を出で流れに沿ふて右手に曲りたる處即ち此庵室廣間の縁先にして、如何にも廣々としたるが初風爐時節に於て最も宜し腰掛前は兩岸石組の流れを隔て、鬱蒼たる樹木の植込あり、恰も此腰掛を中間として右と左に一は古石塔、一は大燈籠を立て並べ、此處に山庵めきたる光景を添へたるは庵主の意匠慘澹たりし所なるべし、下草を蟲に喰はれて處々に臺灣坊主の景色を見せたるには、庵主も甚だ氣を揉み居りし様なれば、茶人の情として今度は之を批評の材料とさるべし、斯くて暫時休息する程に合圖の銅鑼は鳴り出しぬ、屢他人の銅鑼を

評して時に口禍を招きたる當庵主はあべこべに一本參られざるやう大に注意せし者の如く、音響のムックリとして搖曳の頗る長きは、定めて大銅鑼なるべしと聞取りぬ、扱て後座の床を見れば、神尾藏帳古銅鑼花入に、殘花と覺しく花葉共に締りたる大山蓮華を、活け、木地曲水指の前に荒磯の袋掛りたる茶入を置きて、濃茶手前に取掛られしが、其器物は、

茶入 瀧浪手松花
堂銘斑衾

茶碗 蒔麥權十郎
歌銘玉川

茶杓 古田織部作

建水 砂張

蓋置 青竹

茶 君が代

如上器物中瀧浪手茶入は竹挽家に松花堂筆粉字形にて斑衾の二字あり、余は松平直亮伯家に於て瀧浪の本歌及び同手志賀を拜見し、又他所に於て白浪を一覽せし事あれば、彼の茶入をば一見瀧浪手と推定せしが、此手は其本歌に於てすら金華山釉の比較的牙えぐしからざる者なるに、此斑衾に限りて光澤最も麗しく、柿金氣地釉の上に黒釉の景色美事に現はれたるは大に異數と爲すべく、且つ此手の茶入に限りて多くは浪に縁ある名目あるに引替へ、松花堂が如何にして之を斑衾とは命名せしや、茶

人の一考を要する所ならん、蕎麥茶碗は無疵にして、總卵子色中口廻り外部に一ヶ所空色の釉變りを印したるは此茶碗の命とも見るべく、腰廻りに深き一段なき處を見れば、本手蕎麥にては非ざるべきか、後其箱を拜見せしに蓋表に權十郎筆にて玉川の二字あり、其裏に

駒とめてなほ水かはむ山吹の

花の露そふ井手の玉川

の古歌を書附けられしが聞けば是れは馬越化生翁愛藏三蕎麥茶碗中の一品にて、同郷の縁故もあらんが、兎に角翁の手より此茶碗を引上げたる庵主の腕前、鬼の腕を切り取りたる渡邊の綱の夫れにも劣らず、物凄しなど言ふばかりなし。

四

葉雨庵の濃茶一巡するや、薄茶は廣間にて差出すべしと言はるゝにぞ、今度は露地に由らず茶室の通ひ口より廣間の方に打通れば、六疊敷の一間洞床に松花堂筆團扇形左竹に頬白、右梅に雀二幅對を掛け、其前の小高き春日卓に白高麗象形香爐を置きて、

之れに名香柴舟を薰ぜられしが、掛物は遠州藏帳の由にて出来も美事に表具も結構なるが、嬉しかりき、顧みて道具席を見れば、笠翁作と覺しき瀬戸物蜻蛉を張込みたる時代金地風爐、先屏風の前に、長板を置きて、大西淨林作銅風爐に同作松花堂松風文字火打銀附釜を掛け、青磁揃ひにて嫁御寮の薄茶手前ありしが、其飾附は左の如し。

水指 青磁手桶

杓立 青磁不遊環

建水 青磁

蓋置 青磁夜學

茶碗 熊川銘白雲

替 道樂作黒

茶入 不味公好み 松民蒔繪松葉棗

茶杓 象牙

席上には遠州好み煙草盆に染附山水火入を置き、唐物菊形盆に相生糖、網代木の惣菓子盛りて、順次薄茶を侷められしが、扱ても此葉雨庵開席は、當庵主空前の出来茶にして、益田鈍翁が一聾人の名を以て中外商業新報紙上に其品評を試み、近來見る能はざる茶會にて愉快の情限りあらずとて、踊の浚ひに出したる孫娘の成功を悦ぶが如く、口を極めて褒め立てられしも、亦強ちに無理ならず、寄附より露地鉢前、小間廣間に至るまで、千軍萬馬の間を馳驅したる老功の經驗に依りて、主客の便宜に適ひたる方

式を採用したる注意の周到感服の外なく、道具組に於ても寄附の香煎入、小間の古銅鍔花入、茶碗、茶入共、申分なく、雑器に至りては、唐津の香物鉢など、茶人の垂涎を禁ず可からざる者あり、近來道具の買入は、入札市場に限りたるが如き世の中に在つて、何時の間にか斯く世に知られざる遺賢を抱へ込まれしやと、岡焼する人さへありし程にして、庵主の丹精容易ならず、彼が風雅生涯に入りたる劈頭第一の茶會として、如何に其精神を打込み居るやは、今更多言を俟たざるなり、左れど今や幻庵の茶臘も漸く開けて唯褒めらるゝを喜ぶのみに非ず、否寧ろ他の棒喝を待受くる程度に達したるやう思はるれば、老牛の犢を甜るが如く、只一向に甘やかすのみが庵主に對する挨拶にも非ざるべし、余は此意味に於て此大出來茶中より二三不得心なる所を指摘して、聊か葉雨庵主の笑覽に供せんと欲するなり。

五

茶評家の茶人に對するは、禪師家の雲水に對するが如く、其技倆に應じて鉗錘の緩嚴を加減せざる可からず、到底向上の見込なき者に大喝痛棒を加へたりとて、何等の手

應なかる可きが故に、追窮は無益の沙汰なれども、今後ドシ〜茶會を催し、ドシ〜茶評を試むべしと云ふ葉雨庵主の如き反撥心ある者に對して、徒に緩手段を弄するは、斯道獎勵の本旨に非ざるべし、余は此見解に於て葉雨庵茶會に就き、二三心附きたる所を直言して、庵主の一笑に供せんに、先づ寄附に於て不味公好みと云へる櫻紅葉、蒔繪銀火屋煙草盆を出されたるは如何なる作意にや、花見茶會など云ふ場合ならば、是れも當座の一興として見るべけんも、眞面目なる新庵開席の際、家根裏を見せたる寄附に、此煙草盆は如何にしても不自然なり、殊に此席に時代菊折枝蒔繪亂箱を置きたるは、蒔繪が並びて目觸りなるのみか、本來此亂箱は何の役に立つ可き者なるや、殘菜入を置く可きか、あらず、豈夫に金時計も載せらるまじ、余は他席に於て時に此亂箱を見る毎に、常に無用の長物なりと思ひ居りしに、理窟勝ちなる當庵主の寄附に於て、今又之を見受けんとは、寧ろ案外の感なきを得ず、小間に於て墨蹟に對して古銅鍔花入を選ばれたるは、左る事ながら、今や既に殘花と見るべき遅れ咲きの大山蓮華を挿みたるは、合點行かず、本來此鍔花入は口切茶會に白椿などこそ相應しからぬ、今

度は寧ろ一重切邊にて時候の花を用ひたらばと思ふは如何に廣間に於て氣の利きたる松花堂二幅對の前に何處やらの今遠州が好みさうなる春日卓に白高麗象形香爐を重々と飾りたるは到底三十棒を免る能はざるべし露地に於て廣間縁先に古石塔と石燈籠を左右に並べて背較べさせたるは庵主の心にては兩手に花とも見るべけんも其兩々對峙するが雷門の二王然として築庭眼には到底容赦なり難し斯く云へばとて余は今度の大出來茶會を傷けんとする者に非ず禪家に言得三十棒不言得三十棒と云ふ事あり即ち棒の活用にして貶に對する棒あるが如く褒に對しても亦棒あり余の此一言の如き言ひ得る相手に對する褒中の一棒として庵主の快く諒受せられんと期望の至りに堪へず猶ほ葉雨の庵名は最も余の心に愜ひ木の葉の時雨が窓を打つ頃『焚く程は風がもて來る落葉かな』など云ふ境涯を思ひ浮ぶれば茶味自ら津々たる者ありあはれ當冬は余等をして庵名に相應しき幽趣を此庵室に味はしめられん事余の今より庵主に囑望する所なり。

鹿島の周文

(大正八年六月十六日)

鹿島組主人鹿島精一氏所藏周文筆湖山小景圖東福寺紅蕉惠鳳禪師讚一軸は主人の先代岩藏氏の秘愛にして世に之を鹿島の周文と稱せり古畫備考に此一軸の事を記して、

飯山侯藏中紫印金リンボ金泥を交へ代赭石を入れ遠山淡青甚だ美事に周文中の壯觀なり。

とあり左れど岩藏氏は之を姫路酒井伯家より譲受けたる由なれば或は抱一上人の實兄にして文化文政頃數寄者の稱ありし彼の雅樂頭宗雅侯が飯山侯より譲受けられたる者なるやも知らず紙本堅幅にして樓閣人物遠山近浦描寫神に入り畫面極めて綺麗なるに加へて珍しくも金泥を以て霞を引きたる筆致如何様周文中の絶品と見受けらる然るに鹿島家にては今度都合に依り來る二十一二兩日之を兩國美術俱樂部に展陳して入札賣却に附する由なるが此一軸に就き甚だ興味ある逸話あり今

を距る事十數年故井上世外侯周文の山水二幅を所藏し、一は京都五山僧合讚山水長上幅(後早川千吉郎氏に譲り渡す)一は無讚秋景着色山水圖(後鴻池善右衛門男に復歸)にして、侯は之を天下周文の双絶と自負し居りしに、或る人鹿島岩藏氏が非凡の周文を所藏し、侯爵のと雖も之に對すれば或は遜色あるべしと告げければ、負けず嫌ひの侯は、ナニ乃公のより好い周文がある者かとて容易に之を信ぜざるにぞ、左らば鹿島方に趣きて其周文を一覽せらるべしとて、一日侯を鹿島邸に請じ、彼の湖山小景圖を示せしに、流石の侯も感に打たれて、到頭我を折り、成る程是れは聞きしに勝れり、若し余が此幅を所持すれば、周文に於ては最早天下無敵と爲れば、是非とも割愛せられよとて、即座に懇望して已まざれば、岩藏氏も大に閉口して一時頗る持て餘せしが、是れ許りはと峻拒して侯の所望に應ぜざりし其代り爾後何人より大金を以て懇望せらるゝも、氏の一代中は遂に之を手放さず、故侯に對して義理立せし次第なるが、今や双方他界せしにぞ、今回割愛に決したりと云ふ、從來周文山水中に金泥を用ひたる者なきに非ざれども、此一軸の如く綺麗にして、圖様筆致とも十分周文の特色を發揮した

る者は殆んど比類なかるべく、已に前記の逸話さへ傳はり居れば、余は此機會に於て後日の語草として、茲に傳聞の記憶を認め聊か數寄者の一粲に供する者なり。

東都茶會記第七輯上卷終

202
299

